続々花木漫録

原　秀雄

久しぶりでまたまた花木に漫筆をもてあそぶこととしたので、しばらくおつき合いを願いたい。もとより漫筆のこと故どこからはじまり、いずれにおちつくことやら知るところではないが、筆のおもむくに従つて記すこと下のごとくである。

トチノキ　六月ごろ函館本線の列車に客た、房をさかしまに立てたような花の咲く木が目につく。この花房は走る列車の窓からもそれと見さだめられるほどに大きなもので、長さ二〇～三〇糎におよび、中々に見事である。この木はわが国の北から南までの各地の落葉広葉樹林地に自生し、木の高さも二五㍍にもおよび春の芽出しの葉は紅を帯びた褐色、秋には黄から褐色になつた大きな葉が、粘液で覆われた大きな各芽を枝に残して、一ひらずつ葉柄からはなれてバサリと地に落ちる。稚い枝には赤褐の軟毛を生ずるが、しばらくで無毛となる。

この木にはいろいろの方言名があつて、上原敬二博士の樹木大図説には三五余りの名がのせられている。トチノキの語源はアイヌ名トチニにもとづくとされている。

松前志に『山中此木多し実を結ぶ童子愛之葉大にしてカヘデの如し熊好て其実を食ふ』とあるが、この実は黄褐色で円く、径五糎くらいとなつて分裂し、内に大きな栗色でつやのある種子を蔵し、その半以上は黄褐色の臍痕をなす。この種子はトチノミと称えて打身のはり薬にしたり、内に含まれるサポニンを利用して石鹸代用にしたり、またこの渋いサポニンを取去つて粉にし、他の穀粉とまぜてトチ餅を作りなどする。

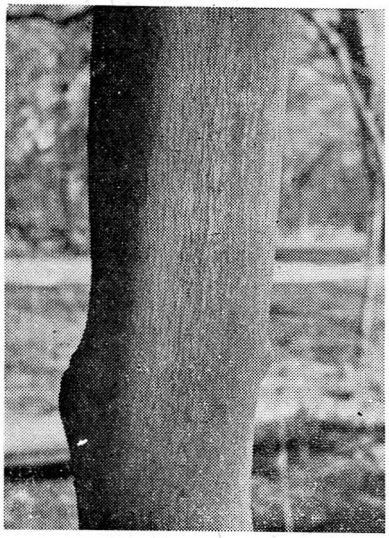
トチの名は万葉集にも見え、古くから知られる木である。渡島亀田郡銭亀沢村の白木神社の神木は、高さ一五㍍、根元の周り三㍍におよび、相幹で六〇〇年を経ているといわれている。

大和本草に『其木理黄黒の横紋のすぢあり、器とす、硯筥重箱などに作る。』とある。木は軟かく細工はしやすい。

公園の植込み、並木などに用いてよく、また庭に緑陰を作る木としてもふさわしく、花のないときにも葉に一種の風格がある。この種子は実が熟し落ちて割れ、大きな種子が転げ出るから、採つて排水のよい場所に土中または川砂の中に貯え、翌春早く掘り出して蒔付けるが、土砂の内に貯えないで普通の室内などにおくと、乾きすぎて発芽力を失うことがあり、また土砂の中に貯えた種子は早く土砂から出さぬと、貯えられたままで芽を出し根を出すので、できるだけ早く掘り出して直ちに蒔くようにしたい。実生してから十七八年で花を咲くようになる。伸長も割合によい。この木は排水のよい、しかも水湿に欠くことのない、肥えた土地をもつとも好む。パリのマロニエといえばあまねく知られた有名なものだが、このマロニエこそはここにいうトチノキの一種である。植物園相互の種子交換でマロニエの種子をとり寄せたことが昔あつた。いつも紅海、印度洋の船中で傷められるのを常とし、満足な状態で来たものは一つもなかつたが、今では航空便が発達したので、これを取よせることもたやすくなつた。

ハクウンボク　この木はエゴノキ科の落葉喬木で、高さ一五㍍径〇・三㍍くらいにまでなる。老木では樹皮が縦に裂けて鱗状に剝れるが、概ね黒褐色で平滑である。葉は互生して卵円形有柄で、長さ一〇～二五となると、ちようどタニウツギの赤い花が地上六～七尺の灌木の枝を埋めて開くのを車窓に見るが、それに相対して丈の高い木の梢に、五～七片の葉片を大きく扇状に一本の長い葉柄の先端に開いた葉を枝に対生し、枝端に房を立てたように白いそれで帯紅のぼかしを見せて四弁の花を数十個つけ

（写真はトチノキの花）



ハクウンボクの樹幹

ハクウンボクの枝ぶり